

## フェイスブック（Facebook）に思う

酒井 董美<sup>ただよし</sup>

メールを操作していると、多くの知人からメッセージが届けられる。当方から発信するのに単独で個人対個人でやりとりする場合と、特定のグループ間で同一の内容を送る場合と使い分けられて、至って便利だとしみじみ思い、常に活用し自家菜籠中にもものなつてしまっている。筆者は、適宜、メッセージを送るだけの他に、定期便として、毎週火曜日、『島根日日新聞』に連載している「島根の民話」とエッセイ、書評などをPDFに置き換えて添付して、親族や特定の知人に一斉に送っているが、間接的には筆者が元気に活動していることを、これで知ってもらふことにもなると勝手に解釈している。

それはそれとして送られてくる中には、かなり多くフェイスブック（Facebook）形式のものがある。これにも個人宛のメッセージも入っているが、それ以外の内容も同時に含まれていて、開いて見ると、新しく友人になりませんか、と知らぬ人物のものもいくつか並んでいたりとややこしい。返信する場合に添付ファイルを付けるにはどうすればいいのか迷ったり、案外、そうした場合、当方の意志に関係なく他の人たちにも拡散するのではないかなど心配してみたりしている。筆者は正確にフェイスブックを知らないのですが、使っている方からは総スカンを食らいそうであるが、筆者としては、このフェイスブックは苦手である。いったいフェイスブックはどういうものかとフリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』を見ると、長々解説されていた。冒頭（一部省略）は次のようである。

2004年にマーク・ザッカーバーグと、ザッカーバーグのハーバード大学のルームメイトで同級生だったエドワード・サベリンが創業した。その後アンドリュー・マッコーラム、ダスティン・モスコヴィッツ、クリス・ヒューズなどが加わった。当初は、会員はハーバード大学のドメインのメールアドレスを持つ学生に限定されていたが、ボストン地域の大学、アイビーリーグの大学、スタンフォード大学へと対象が拡大されていった。徐々にさまざまな大学の学生も対象に加わり、やがて高校生にも開放され、最終的には13歳以上のすべての人に開放された。現在のFacebookでは、ユーザー登録時に13歳以上であることを宣言すれば誰でも会員になれる。

サイトの利用前に必要なユーザー登録を行うと、個人プロフィールの作成、ほかのユーザーをフレンドに追加、メッセージの交換、プロフィール更新時の自動通知の受信を行うことができる。加えて、ユーザーは共通の関心を持つユーザーグループへ参加することができるようになる。ユーザーグループは、会社、学校・大学、ほかの属性で分類されている。また、フレンドを「職場の同僚」「親しい友人」といったリストに入れて分類することができる。

このように記されており、まだまだ説明は続いている。実際にフェイスブックを使っていく人々には便利なのだろうが、筆者としては余分な機能がありすぎ、どうしても使いこなす気にはなれないのである。

（元島根大学法文学部教授）